カトリック山手教会月報

やまて

編集・発行　カトリック山手教会 広報委員会　〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎（045）641－0735　http://catholicyamate.org/

第633号　2022年11月13日

鈴木真主任司祭　主日ミサ説教

2022年９月25日　年間第26主日　C年
ルカ福音書　16章　19-31節

今日の説教は、「子どもとともに、ささげるミサ」の代わりとして、子どもたちに向けてさせていただきます。

教会学校の皆さん、元気ですか？２学期が始まって、またみんなに会えてうれしいです。初聖体クラスの人たちが、11月の初聖体に向けて準備を進めています。初聖体クラスの皆さんと、そのご家族の上に、神さまの豊かな祝福があるように、皆さん祈ってくださいね。

さて、今日の福音･･･なんかちょっと感じ悪いですね。金持ちの人が、毎日、贅沢に遊び暮らしてて、自分の門の前にいる貧しい人に何もしてあげなかったら、死んでから大変なことになっちゃった･･･というたとえです。これは、いわゆる天国と地獄とは違います。天国と地獄･･･生きているときにいいことをした人は天国に行けて、悪いことをした人は地獄に行っちゃう･･･そもそもそういうことは、実は、はっきりとは聖書には書かれていません。それどころか、神さまは、すべての命をこよなく愛してくださって、その命がこの世を去ったあとも、ずっとイエスさまを通してつながろうとしてくださっている･･･それを聖書では「永遠の命」と言います。つまり、「命」とは、聖書では神さまとのつながり、結びつきを表すものなんですね。でも、そんな神さまのことを忘れてしまい、自分の楽しみだけを考えて生きていると取り返しのつかないことになっちゃう･･･聖書は、そう警告しているんです。

神さまは、わたしたち人間を、お互いに支え合って生きていくように造られました。そして、神さまがどれほどわたしたちを愛してくださっているかを思い出すとき、わたしたちもお互いに、大切にし合おうって思えますよね。だから、わたしたちが誰かと何かを分かち合おうとすることは、神さまにとってもいつも大きな喜びです。どんな小さなこと、物であろうと、独り占めするんじゃなくて、誰かと分け合おうとすることを神さまは喜んでくださいます。第一、食べ物にしても、何かの物にしても、独り占めしちゃうより、誰かと分け合った方がうれしいし、楽しいですよね。自分一人だけが幸せになるのは、ほんとうの幸せじゃありません。みんなが幸せになることを神さまは、いつも求めておられるんです。

わたしたちが、いつでも、そして、どんな小さなことや物でも、誰かと分かち合うことができるように、神さまに一緒に祈りましょう。

2022年10月16日　年間第29主日　C年
ルカ福音書　18章　1-8節

「やもめと裁判官のたとえ」･･･現代のわたしたちがここを読むと、少々あり得ないことのように思え

て、滑稽にさえ感じてしまうところでもあります。まず「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」･･･そんな裁判官がいちゃ困るよ！と思うし、自分で「自分は神など畏れないし、人を人とも思わない」と言っちゃうところもおかしいですが、実はイエスの時代、こんな悪徳裁判官は、ざらにいたようです。今のように民主的な時代ではないですし、むしろ有力者や権力者に有利な裁きを下すことも日常茶飯事だった、と言います。考えてみれば、イエスご自身の十字架に際しての裁判も、そんな感じですよね。

対する「やもめ」･･･つまり未亡人は、「孤児」や「寄留者」と並んで、当時も社会的弱者の象徴でした。特に徹底した男性優位のイスラエル社会において「やもめ」は、現代では想像できないくらいに弱い存在だったようです。旧約の律法では、そうした弱者を助けるようにと色々と定められていましたが、実際には、そうした人々が「食い物」にされていたのが実情でした。人間の罪の重さを実感せざるを得ませんが、同時に現代でもそれがあまり変わっていないという状況にも、愕然とさせられます。しかし、そんな弱いやもめも、しつこく訴えれば、たとえ悪徳裁判官であっても、そのしつこさゆえに言うことを聞くでしょう、「ましてや神は」と言うわけです。最も小さく弱い存在に、真っ先に目を向けてくださっている神さまをもっと信頼しなさい、と。ただ、最後のイエスの悲観的なセリフが気になります。

「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

毎回言うように、「信仰」とは全く一方的にわたしたちに与えられるものです。その、神さまのはたらきに気づき、受け入れるのが「信仰者」でしょう。

「求めなさい。そうすれば、与えられる（ルカ11:9）」とイエスが言われるように、わたしたちが神さまに頼るのは、全然いいんでしょうね。しかし、どこかでわたしたちは、その結果を自分の都合のいいように、自分の想像どおりに考えてしまっているのかもしれません。そして、それでは、神さまのはたらき、わざが見えてこない、ということです。

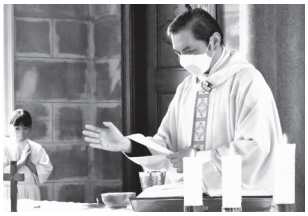
「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために･･･とたとえを話された。」

人の目から見てどんなに悲惨な状況であっても、必ず神さまは、はたらかれている。その神さまのわざに信頼し、そのはたらきに身を委ねよ･･･と言われているんだと思います。

わたしたちは多くを神さまに願います。そのこと自体はいいんでしょうけど、わたしたちが神さまに願う、その「願い」が、常に神さまのみ旨に沿うものでありますようにと願い、また、必ず神さまがそれに応えておられることに、いつも気付きたい、と思います。　（撮影：編集部　土方芳人）

西村英樹助任司祭　主日ミサ説教

2022年９月４日　年間第23主日　C年
ルカ福音書　14章　25-33節



『ゲド戦記』というタイトルの作品をご存知でしょうか？といって、スタジオジブリのアニメーション映画の方ではなく、アーシュラ・K・ル＝グウィン氏の児童文学、原作の方になります。自分自身の内面との対決を描いた『影との戦い』は、特に感慨深い作品かと思います。お勧めです。作中の世界観として、真名（しんめい）、「真の名前」というのがあります。これを知られると魔法によって相手を自由にできてしまう、ですから、人々は、これを明かさないようにいつも偽名を使っている、よほど親しい間柄じゃないと真名は明かさないという設定です。

私が東京から横浜に引っ越して来て、鷺沼教会に通い始めた頃、当時の主任神父様である山野内神父様が「神様は、私たちを造られたとおりの名前で呼ばれている」という話をしてくださいました。私はこれを聞いた時「自分は、どんな名前で呼ばれているのか、ぜひ知りたい！」と強く思いました。

若い頃は、自分探しということにとりつかれたようになる時期があります。自分の果たすべき役割とは何なのか？自分に最も合った、自分の特性を生かした仕事は何なのか？自分とは何者なのか？自分が生きる意味とは何なのか？自分、自分、自分…。

私にも経験があります。しかし、他者からの評価や自分自身の理想のうちには「本当の自分自身」を見いだすことはできないのです。

「教会から若者が離れている」とよく耳にします。しかし、新興宗教に傾倒し、そこで熱狂的になっていく若者が、テレビで取り上げられるのを見るたびに思います。時代は変わるでしょうが、人の悩みというものは、そう多くは変わらないのだと。この悩みに、私たち教会は、きちんと答えてあげられているのでしょうか？むしろそちらの方が気にかかります。

さて、今日の福音書では、「イエスの弟子の条件」があげられています。大雑把に言って二つ。「憎む」こと「腰を据える」ことです。

大勢の群衆が、イエスの後に続きます。この群衆は、何を思ってイエスの後についていったのでしょうか？何かを期待していたはずです。生活のためかもしれません、あるいは、この世の栄達のためかもしれませんし、単なる好奇心かもしれません。もしくは、「このお方についていけば、自分の人生、生き方を変えることができるかもしれない」という崇高な思いを持った者もいたかも知れません。イエスは振り向いて言われます。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」と。厳しい言葉です。注解書によると「憎む」は「より少なく愛する」の意味だとあります。「より」ということは、比較ですので「（何か）より少なく愛する」ということで実際に憎しみを持つということではないでしょう。また、「いのち」とは「プシューケー」「欲望や感情を含め、人間の内面生活の場としての心」という意味があるそうです。つまり、自分のルーツ、周囲の環境としての父母、妻、子ども、兄弟姉妹、そして、自分自身「こうありたい」という理想、欲望、感情などの自我を「（何か）より」つまり、神より少なく愛するようでなければ「わたしの（イエス）の弟子ではありえない」と言っているのです。

私は毎日祈るとき、「わたしが洗礼堅信の代父をした子どもたちを、あらゆる悪からお守りください。そして、第一に神であるあなたを愛する心をお与えください」と祈ります。皆さんも、代父母をなさった代子のためにお祈りすることを強くお勧めいたします。

さて、十字架は死刑の道具です。単に私たちに理不尽に与えられた負債のような重荷ではなく、自らを死に至らしめる処刑具です。ですから、「自分の十字架を背負ってついて来る者」とは、自分自身に死んでいる者なのです。冒頭括弧書きで書かれた「（そのとき）」とは、イエスがエルサレムへと向かう旅の途中です。それは、イエスの十字架の死へと向かう旅路です。私たちが自分の十字架を背負ってイエスについていくならば、それは復活にも結ばれています。ですから、パウロが「ガラテヤ人への手紙」でいうように「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」（ガラテヤ２:20）というとおりなのです。

先ほど読んでいただいた第２朗読は、獄中のパウロがフェレモンへ逃亡奴隷のオネシモについて書き送った手紙ですが、ここでもキリストによって新たに生かされた者としての態度が語られています。奴隷は財産です。ですから、奴隷とその主人は主従関係ではありません。所有者と所有物の関係です。しかし、キリストによって生きる者であるあなた（フィレモン）が、同じキリストが命をかけられた者（オネシモ）を見るならば、それは愛する兄弟なのだ。その関係は奴隷制度という社会的な枠組みを超えた、恵み深いものであるとパウロは言います。奴隷は対価によってその関係は変わります。また、傷つけられた尊厳は、憎しみという棘を残し、心から与える奉仕ではありえません。しかし、キリストの愛によって結ばれた者同士は、互いに思い合い支え合う兄弟関係となるのです。「手放す」という人の目に映る、一見愚かな行為は、私たちを超えた神の知恵なのです。

第１朗読『知恵の書』では、「神の計画を知りうる者がいるでしょうか。主の御旨を悟りうる者がいるでしょうか。死すべき人間の考えは浅はかで、わたしたちの思いは不確かです。」と、人の身での限界を語ります。知恵の書の大前提は「知恵は神からくる」という

ものですが、現代社会に生きる私たちにとっても、多くの社会的問題や異常気象などの問題に目を向けるとき、人の知恵の小ささを知るのではないでしょうか？奇しくも今日は「被造物を大切にする世界祈願日」です。被造物の共同の管理者として、知恵を求める必要があります。「こうして地に住む人間の道はまっすぐにされ、人はあなたの望まれることを学ぶようになり、知恵によって救われたのです。」キリストイエスは、十字架の死によって、人類と神とのきずなを新たにされました。これによって、すべての被造物は新たに創造されたのだと、わたしたちキリスト者は信じています。「天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、だれが御旨を知ることができたでしょうか。」いまこそ神の知恵を願い求めましょう。

「キリストに従っています。わたしたちはイエスの弟子です」ということは、「善行を尽くす」とか「大罪を犯さない」という程度のことではありません。むしろ、「自分に死ぬ」「自分を虚しくして神に従う」ということであり、だからこそ「腰を据える」覚悟がいるのです。自分を保ったまま、新しい命を受け入れることはできません。

あなたはいま、「自分は一体何者なのか？」「生きる意義とは何なのか？」「自分の成すべきことと自分の価値とは何なのか？」悩んでいますか？もしそうならそれは、神からの招きです。私にも経験があります。自分の襟首を持って自分を持ち上げることができないように、自分自身を捨てなければ、その答えは知りようがありません。どうか、上からの知恵、「天の高みからの聖なる霊」を求めてください。きっと神は答えてくださり導いてくださいます。わたしたち神の民の上に、教会の上に、そして、全世界の上に、聖霊の導きがありますように願い求めてまいりましょう。　（撮影：編集部　土方芳人）

新しい「ミサの式次第」実施に向けて③

主任司祭　鈴木真

最後に、ミサでよく使う「第２奉献文」の本文を、変更点を確認しながら掲載します。（下線部が変更される言葉です。）

司祭:　まことに聖なる神、すべての聖性の源である父よ、いま、聖霊を注ぎ、この供え物を聖なるものとしてください。

わたしたちのために、主イエス・キリストの御からだと✝御血になりますように。

主イエスはすすんで受難に向かう前に、パンを取り、感謝をささげ、裂いて、弟子に与えて仰せになりました。

「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ（である）。」

食事の後に同じように杯を取り、感謝をささげ、弟子に与えて仰せになりました。

「皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血（である）。これをわたしの記念として行いなさい。」

司祭:　信仰の神秘。

会衆:　主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。再び来られるときまで。

司祭:　聖なる父よ、わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、み前であなたに奉仕できることを感謝し、いのちのパンと救いの杯をささげます。

キリストの御からだと御血にともにあずかるわたしたちが、聖霊によって一つに結ばれますように。

世界に広がるあなたの教会を思い起こし、教皇○○○○、わたしたちの司教○○○○、すべての奉仕者とともに、あなたの民をまことの愛で満たしてください。

また、復活の希望をもって眠りについたわたしたちの兄弟姉妹と、あなたのいつくしみのうちに亡くなったすべての人を心に留め、あなたの光の中に受け入れてください。

いま、ここに集うわたしたちをあわれみ、神の母おとめマリアと聖ヨセフ、使徒とすべての時代の聖人とともに、永遠のいのちにあずからせてください。

御子イエス・キリストを通して、あなたをほめたたえることができますように。

キリストによってキリストとともにキリストのうちに、聖霊の交わりの中で、全能の神、父であるあなたに、すべての誉れと栄光は、世々に至るまで。

会衆:　アーメン。（会衆は「アーメン」だけを唱えます。）

ちなみに、以前、奉献文はローマ典礼文の一つだけでしたが、第２バチカン公会議の典礼改革によって、四つになりました。第１は今まで使われていたローマ典礼文､第２は「ヒュッポリトスの使徒伝承」と言われる文書から作られました。この第２奉献文がよく使われるのは、短いということもさることながら、使徒たちが唱えていたのと一番近いものだから、という理由があります。第３は第１と第２の融合、第４は東方典礼の伝統を取り入れたもの、と言われています。

ミサの後半である「感謝の典礼」の、言わば中心となる「奉献文」。新しい文言に一日も早く慣れて、大切に使っていきたいと思います。

第54回横浜教区一粒会大会開催

首題の大会が10月10日（月）12時から15時まで、カリタス女子中学高等学校で開催されました。

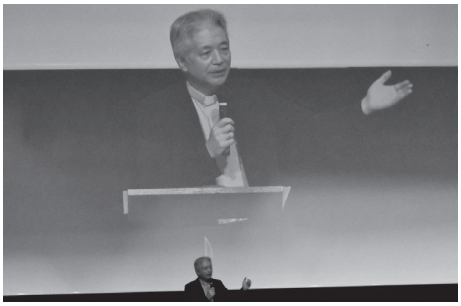
テーマは「皆の兄弟姉妹として生きる」、開会式は①開会宣言：一粒会大会実行委員長・平尾譲氏②開会・召命の祈り：神奈川第１地区一粒会指導司祭・岩間 勉師③開会の挨拶：横浜教区一粒会常任本部委員会委員長・宮崎 香氏―でした。講話のタイトルは「皆の兄弟姉妹として生きる」、講師は名古屋教区長・松浦悟郎司教でした。

その後、大会ミサが横浜教区長・梅村昌弘司教主司式で執り行われ、梅村司教から①2020年から2022年叙階司祭②2022年慶祝司祭③参加司祭―の紹介がありました。

閉会の挨拶は一粒会総指導司祭・古川 勉師が行い､最後に梅村司教の使徒的祝福で幕を閉じました。

コロナ禍での開催のため、感染防止対策として人数制限と時間短縮をしての開催でしたが、温かい雰囲気のすてきな大会でした。担当された神奈川第１地区の大会運営委員会の皆さまに感謝いたします。

松浦司教講話（要旨）


名古屋教区・松浦悟郎司教

「皆の兄弟姉妹として生きる」一般の方がこのテーマを聞いてどう思うかというと、わたしたちは兄弟姉妹ではないけれども、比喩的に兄弟姉妹のように仲良く、お互を大切にしあって生きましょうとか、そのようなイメージでとらえると思います。

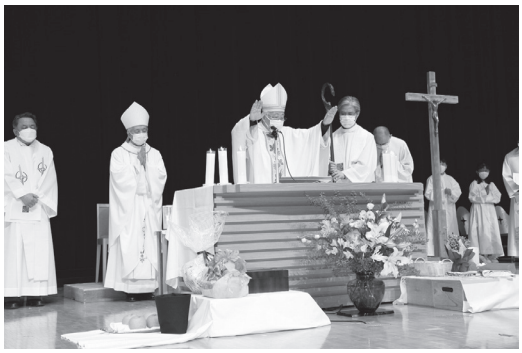
しかし、わたしたちは、そうではなくて兄弟姉妹のようにではなく、わたしたちは神の前に兄弟姉妹として造られたのだという事実。これをわたしたちは信じている。そして、兄弟姉妹として造られたにもかかわらず、わたしたちの世界は分裂や差別があり、お互いが苦しみあっている。そこへキリストが駆け寄り、一緒になって本当の目的、つまり神の前に兄弟姉妹であるということをいつの日か完成する、そこへ向かって歩んでいる。という意味では、わたしたちは兄弟姉妹であるという確信のうえにわたしたちの歩みを考えることがとても重要だと思います。洗礼の召命が教会の使命の根本で、すべての人にある召命です。その中で、キリストに従う生き方として信徒、司祭、修道者として、それぞれの違った役割がある。信徒の中でも一人ひとり違う呼びかけがある。司祭の中でもそうです。そうやって召命が司祭職とか信徒の奉仕職とか信徒の召命につながるわけです。

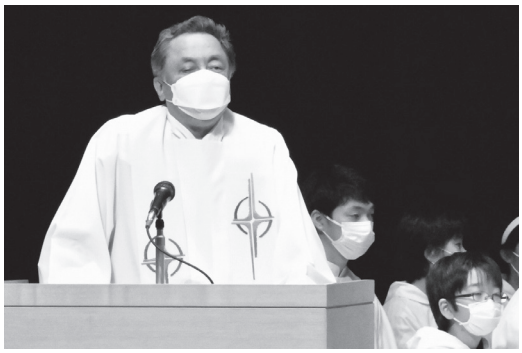
わたしたちは、神が呼びかけておられる声を聞いて歩みだすわけですが、単にその声は、わたしを愛して名前を呼ばれるだけでなく、生き方へと招くのです。わたしは、あなたとともにいる。だから本当の目的に向かって、あなたも一緒に歩いてほしいとキリストは言っています。それは、いつの日か神の前にすべての人が兄弟姉妹となる完成の時に向かって。この歩みを聖書も教会も「旅」と呼びます。

血縁、わたしの家族、親族。それは、わたしの人生にとって生きるうえで大事だが、出発点であって目的ではない。そこから出発して越えて行かなくてはいけない。地縁、血縁を超えて神の前に、みな等しく大事な兄弟姉妹となる関係性へと旅をする。はっきり使命を知ってイエスについて行こうとしたのが、あの弟子たちでした。イエスが「わたしについてきなさい」と言ったから自分の生活を捨てた。生き方として他のものでなく、イエスの生き方に従うというものでした。それは旅でした。

第２バチカン公会議では、教会は旅する教会と言われました。わたしたちは旅をしているということ。そのことから考えると、わたしたち教会は非常に重要な役割を持っている。一人ひとりに召命があるように、教会としての召命がある。共同体としての召命がある。そこに向かってわたしたちは歩んでいる。間違えていけないのは、教会は教会自身が豊かになって、すごくすてきな場所になり、そこで満たされるという教会の完成が目的ではない。第２バチカン公会議では、教会はそれ自体が目的ではなく神様との親密な交わりと全人類がひとつになるためのしるしになり、道具になりなさいということ。わたくしたちの教会がすばらしいと、わたしはそこにいるとうれしく、いつも満たされる。それで終わってはいけない。それが目的ではない。そこがしるしになり、道具となりなさい。だから、教会は誰もが排除されない教会であってほしい。それは世界の人々のしるしになり、教会に来て一緒に祈り、恵みを受けることにより「行きなさい」と言われて、今度は教会から一人ひとりが社会の中に出て、その使命を生きていく。それが教会のしるしであり、道具になりなさいという意味です。

そういう意味で、わたしたちは原体験に基づきながら使命をもって兄弟姉妹としての完成に向かって皆さんと歩みたいです。





閉会の挨拶：一粒会総指導司祭　古川　勉師

（撮影：ミサ・大会実行委員会提供、その他・編集部　土方芳人　文：土方芳人）
※ミサは撮影禁止でした。

2022年10月度教会委員会議事要約

日時：2022年10月２日（日）13：30～15：20
場所：信徒館１階「松・竹」
議事内容（議事進行：小倉委員長）

１　主な審議確認検討事案　※順不同

⑴　聖堂修復工事の状況について

- 工事は、予定どおり進行中。今後、重機による屋根の修繕が行われる。
- 工事による安全を確保するために出入りを制限している箇所があるが、無視して出入りしている人がいる。危険である上に工期に影響する可能性もあるので改めて周知する必要がある。

【決定事項】
・改めてアナウンスを行う。

⑵　ミニ福祉イベント開催について

- ６月に開催したミニ福祉イベントが好評であったことから第２回を11月27日（日）、12月４日（日）

で計画している。

【決定事項】

・承認。

⑶　ホームページへの聖堂工事写真掲載について

●外部に対して聖堂が工事中であるということを示し、普段、教会に来られない方や観光客に工事中ということを知らせたい。

【決定事項】

・承認。

⑷　七五三のお祝いについて

今年の七五三のお祝いについて

【決定事項】

・11月13日（日）11時半のミサ後に七五三の祝福を行う。

⑸　結婚式の受付再開について

●結婚式の問い合わせが立て続けに２件あった。今後の結婚式対応について検討されたい。

●結婚式は修繕が完了したら通常どおりにできるようにしたい。

【決定事項】

・結婚式の申し込みや結婚講座について再開を検討する。

⑹　今後のミサについて

●朝と土曜日に行われる日本語のミサは、参加者が大変少ない。特に、土曜日はグループに分ける必要はないように思われる。

【決定事項】

・土曜ミサは、10月22日（土）より試験的にABグループを統合する。

・その他については、様子を見て11月度の教会委員会で審議とする。

⑺　クリスマスミサについて

今年のクリスマスミサの方針について

【決定事項】

・日本語と英語のミサともに事前申込制。時間は通常の土日のミサの時間と同じ。

・12月24日（土）、12月25日（日）、12月31日（土）、１月１日（日）各回上限100人の事前申込制とする。夜中のミサは行わない。

⑻　入門式の日程について

【決定事項】

・待降節第1主日11月26日（土）17時ミサで入門式をおこなう。

2　今後の活動、報告事項

【典礼委員会より】

奉仕の勉強会

●朗読:10月16日（日）11時半ミサ後1時間半ほど。

●先唱：11月13日（日）七五三の祝福後を予定。

【第3地区共同宣教司牧委員会について】

●10月16日（日）司教館で開催。

●会場教会の教会委員長が司会。

【ロザリオ会より】

●11月４日（金）ロザリオ会主催のミサを行う。

【ヨゼフ会より】

●ヨゼフ会から聖堂修繕として寄付。

●来年度のイベントとしてチャリティコンサートを予定している。

【幼稚園より】

●幼稚園では工事期間中は危険なのでホールには一切入らないようにし、例外的にクリスマスのときのみ３回だけ使わせていただく。七五三は幼稚園で行う。

●駐車場での送迎は、おかげさまで問題なく安全に運用できている。

【墓地委員会より】

●墓地での祈りを司祭と墓地委員のみの参加で、11月11日（金）10時から各墓地で行う。

【みこころコーナーより】

2023年の手帳・カレンダーの販売

●11月第１、２週に受付を行い、12月第１、２週にお渡し。お渡し時にも新規の受付をする。代金は前払い。

3　主任司祭から

●2023年の司教訪問について、５月28日（日）聖霊降臨日の主日に堅信式司式を依頼する。

4　次回教会委員会

11月６日（日）13時00分～15時00分終了予定。

（総務担当　宮 裕一）

2022年11月・12月主日ミサの聖歌および奉仕者予定表

	主日	聖歌（歌わずに章句を唱えます）			聖歌隊	時間	奉仕者				ミサ参加割当
		答唱詩編	アレルヤ唱	感謝の讃歌			オルガン	先唱	聖書朗読		
11月13日	年間第33主日	典149 ③④	典274 第33主日C	典205		前日pm5：00	村松	斎藤	鈴木(明)	福田(直)	夜ミサAB
						7：30	中川	二宮	東海林	時久	朝ミサB
					＊	11：30	佐藤	遠藤	石田	中野(説)	昼ミサB
20日	王であるキリスト	典173 ①②③	典266 王であるキリスト	典205		前日pm5：00	藤沼	山本(康)	工藤(元)	志村	夜ミサAB
						7：30	渡邊	末澤	石川	中村(桂)	朝ミサA
					＊	11：30	中川	村田(義)	中川(由)	岩隈	昼ミサA
27日	待降節第１主日	典173 ①②⑤	典255 待降節第１			前日pm5：00	村松	田中(麻)	羽石	阿部(眞)	夜ミサAB
						7：30	手塚	亀井	古谷(浩)	二宮	朝ミサB
					＊	11：30	米沢	藤原(ま)	中山(峯)	鈴木(理)	昼ミサB
12月４日	待降節第２主日	典136 ①②④	典255 待降節第２			前日pm5：00	村松	竹之内	新井田	島田(節)	夜ミサAB
						7：30	太田	石賀	鈴木(幸)	鈴木(由)	朝ミサA
					＊	11：30	手塚	山本(紀)	鈴木(理)	大澤	昼ミサA
11日	待降節第３主日	典19 ①③④	典255 待降節第３			前日pm5：00	村松	斎藤	鈴木(明)	福田(直)	夜ミサAB
						7：30	中川	二宮	東海林	時久	朝ミサB
					＊	11：30	佐藤	遠藤	石田	中野(説)	昼ミサB
18日	待降節第４主日	典158 ②③④	典257 待降節第4A			前日pm5：00	藤沼	工藤(元)	飯塚	志村	夜ミサAB
						7：30	渡邊	末澤	石川	中村(桂)	朝ミサA
					＊	11：30	中川	村田(義)	中川(由)	岩隈	昼ミサA
25日	主の降誕祭	典148 ①④⑤	典258 主の降誕夜半		＊	前日pm5：00	佐藤	田中(麻)	羽石	阿部(眞)	別途選定
						7：30	手塚	亀井	古谷(浩)	藤本(茂)	別途選定
		典149 ①②③	典258 主の降誕日中		＊	11：30	米沢	藤原(ま)	中山(峯)	鈴木(理)	別途選定

編集後記

もうすぐ新年を迎えますが、皆さんは「小倉百人一首かるた」にどのような思い出がありますか。若い世代の方々の中には“見たこともない”という方もいらっしゃるかと思いますが、「小倉百人一首」とは今から約730年前に鎌倉時代の歌人である藤原定家が百人の歌人の和歌を一人につき一首ずつ選んでまとめたもので、それを「かるた」にしたものが「小倉百人一首かるた」です。この歌集は、すべて「古今集」や「新古今集」などの「勅撰和歌集」から集められています。小生がこの「かるた」に出合ったのは小学４年生のころで、家族が母の実家の隣に家を新築して引っ越して来てからでした。実家では、正月には毎日、幼い子どもを除き家族全員で、この「かるた」をするのが恒例行事となっていたのです。そのため、小生の家族も必然的にこの「かるた」をするようになり、「かるた」がぼろぼろになるまで使用していました。また、叔母が実家で小学生を対象にした塾を経営していたので、塾でも正月は生徒全員参加による「小倉百人一首かるた大会」を毎年開催し、小生も参加していました。幼い子どもたちは、「かるた」の絵札（読み札）を裏返しにして積み上げたものを順番にめくり、お坊さんの絵が出ると自分の持ち札をすべて捨て、お姫様の絵が出るとすべての札をいただけるという「坊主めくり」という遊びをしていました。このような形で自然と古典文学に親しむことができたのは、とても恵まれた環境にあったと感謝しています。（土方芳人）

☆表紙のカット（山手教会）は、濱尾文郎枢機卿様の「えはがき」です。